

まえがき

著者	箭内 彰子, 道田 悦代
権利	Copyrights 日本貿易振興機構 (ジェトロ) アジア 経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) http://www.ide.go.jp
シリーズタイトル	研究双書
シリーズ番号	610
雑誌名	途上国からみた「貿易と環境」 : 新しいシステム 構築への模索
ページ	i-iii
発行年	2014
出版者	日本貿易振興機構アジア経済研究所
URL	http://hdl.handle.net/2344/00011242

ま え が き

自由貿易体制の維持・強化と環境保護の推進、この二つの要素の関係性を明らかにしようとする「貿易と環境」の議論は最近始まったものではない。古くは1970年代から研究が進められてきており、その過程で多くの知見が発見・蓄積されてきた。初期の頃は、貿易と環境は相反するととらえ、それぞれが相互にもたらす影響の解明が中心的な課題であったが、1992年の地球サミットで自由貿易と環境保護は相互支持的に達成し得るという認識が示されてからは、両者を調和するための方策についても、さまざまな考察が試みられてきた。また、一口に「貿易と環境」といっても、その研究対象は広範にわたっており、多様な切り口が考えられる。科学的なアプローチも可能であるし、経済学的、法学的、政治学的方法論もある。

このように「貿易と環境」問題は複雑で、広範で、多くの先行研究を擁するすでに成熟した研究領域である。それをあえてテーマに取り上げたのは、途上国に関する情報を日々集めるなかで、「貿易と環境」をめぐって何かが変わり始めているという実感をもったからである。そして、途上国の持続的開発という観点に立ったとき、途上国が抱えている課題に対応していくための新たな知見が得られるのではないかと思ったからでもある。

開発途上国研究を行うアジア経済研究所として、この「貿易と環境」問題をどのように扱うことができるのかを考え、2010年度にこれまでの議論を整理する基礎理論研究会「貿易と環境：途上国の持続可能な発展に向けて」を立ち上げた。その目的は「貿易と環境」の議論における途上国の視点を理解することであった。「貿易と環境」をめぐって先進国と途上国の意見が対立する理由に、環境規制が経済成長に対して負の影響をもつのではないかという懸念がある。とりわけ途上国では輸出が経済成長の牽引力と考えられているため、貿易に対する環境規制の影響は途上国の関心が高い分野である。そこで、まず「貿易と環境」に関連して途上国が抱える問題の実態把握を行っ

た。

その後、この基礎理論研究会を発展させて、2年間にわたる共同研究会「途上国の視点からみた『貿易と環境』問題」(2011~2012年度)を実施した。「貿易と環境」をめぐる国内レベルおよび国際レベルの政策・措置が途上国の環境保護や産業発展にどのような影響を及ぼしているのかを検討することにより、「貿易と環境」に関する既存の制度や政策の問題点を明らかにすることを主眼とした。そして、自由貿易の推進と環境保護という二つの要素を調整しつつ途上国の持続可能な開発を実現するには、今後どのような対応策が必要かについての考察を試みた。

本書はこれら二つの研究会の最終成果である。基礎理論研究会の開催から本書の原稿執筆までの過程では、30回に及ぶ研究会を開催し、参加した各委員の間でさまざまなイシューについて活発な議論を行うことができた。バックグラウンドを異にする研究者が集まっているため、正直なところ、議論がすれ違ってしまうのではないかという不安があった。しかし、それはすぐに杞憂であることが判明し、逆にそれぞれの専門知識を出し合うことで、深く、広く、時には新たな観点から考察することができた。つぎつぎと議論が展開し、大幅な時間延長をお願いしたこともしばしばである。この議論なくしては本書の出版はなし得なかった。各委員の知的貢献に改めて感謝の意を表したい。

また、研究会の実施にあたっては、国内外の政府機関、国際機関、業界団体、民間企業、専門家など数多くの方々インタビューさせて頂いた。本来であれば、ご協力くださった方々のお名前を挙げて謝意を示すべきであるが、紙幅の関係から、さらには匿名を希望される方もおられることから、あえてそれは行わず、この場を借りてご対応頂いたすべての方々に感謝申し上げる。さらに、出版に先立つ審査では、研究所内外の匿名の査読者から多くのコメントを頂いた。これらのコメント、助言に対応するなかで、問題意識を見つめ直し、理論をより明確にすることができ、原稿の改善へとつながった。深く感謝申し上げます。

自由貿易と環境保護の接点は今後ますます増えていくと思われる。本書でカバーしている論点は現状の一部に過ぎない。議論すべきイシューは数多く残っており、新たに発生する課題も出てこよう。新たな研究課題を設定することができたら、その際には、本書の続編に挑戦したい。

2014年3月

編者